愛知学院大学モーニングセミナー　　2023.4.11　市橋章男

徳川家康を徹底解剖してみれば
～秀忠の妻お江に宛てた手紙から見る、家康の人育て～

1　はじめに―「庭訓状」とは何か

（1）家康の目指した国家経営、その理念

・創業者としての経営哲学―「創業と守成のどちらが困難と考えるか」(『貞観政要』より)

・幕府を存続させるということの意味―「家康公遺訓」より

（2）家康は何を心配していたのか

・経済、社会秩序の平和的な存続
・国家大乱の再発
} 大名や役人の強いリーダーシップ

・三代将軍の座をめぐる跡目争い

長男「竹千代」と次男「国松」―実母である二代将軍秀忠の妻「江姫」は国松を可愛がる

・「長子相続制」と「末期養子の禁」―跡目相続をめぐる争いを避ける「定め」

江姫（養源院蔵）

（3）家康が江姫に宛てた手紙―「庭訓状」、「御婦美」とも呼ばれる

・庭訓＝戒め、訓戒の意

・保守的な定めを重んじると同時に、斬新的なリーダー育成法を説く

・「人をコスト」と考えない経営哲学

・徳川将軍家が 260 年余り続いた原点

3　幕府の諸制度に対する理解

（1）武家諸法度と禁中並公家諸法度

・「刀を抜かない」武士のあり方を求めるもの

・役人としての武士たちの倫理―徹底したコンプライアンスの遵守

・参勤交代の制度は大名の力を弱めるためではない

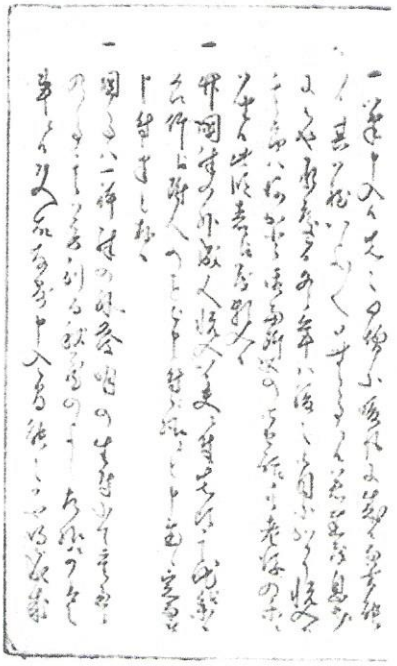
・天皇を「象徴」的存在と考える原点―政治の具にしない

（2）身分制度

・中世ヨーロッパやインドなどに見られる「階級制度」とは異なる

・家制度の中でその職（身）の本分を繋いでいく制度

参勤交代の様子



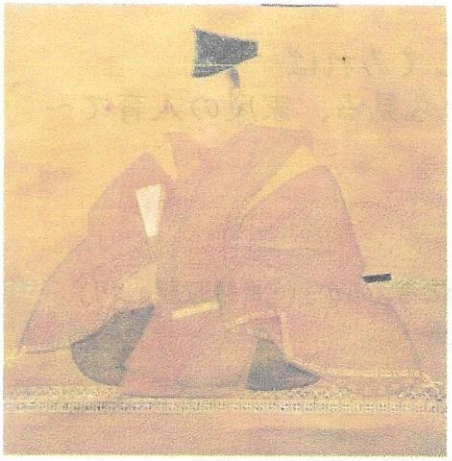
『御婦美』冒頭部分

子育ての基本

国松が格別賢いのは生まれつきで、この上もなく満足なことです。あなたは、特に、国松をかわいがっておられるようですが、よくよく心して育ててください。

幼い者が賢いといっても、そのままで育てば一人前の年齢になった時、気ままな者になり多くは親の言うことも聞かなくなるものです。

わたしの長男の三郎信康が生まれた時、わたしの年齢が若くて子どもが珍しく、その上、やせ細って弱々しい子でした。そのため、無事に育ってくれることだけを願って、気持ちが窮屈にならないようのんびり育てました。一人前の年齢になってから、急にあれこれ教えても、幼いころのしつけがきちんと行き届いていないので、親を敬うことさえ知らず、かえって教えさとす親を恨むようになったのでした。



岡崎三郎信康像（勝蓮寺）

成長した国松（徳川忠長）

総じて、幼いころは、何事も素直に聞き入れるものですから、子どもの言うままなすままでなく、信念をもってきちんと礼儀作法を教えこめば、外の人が考えるほど本人は骨を折ることもなく成長していくものです。わがままを通して自分の願いが望み通りになることは決してありません

第一に　わがままな人は、親をもったいないと思わず、また、親からは見込がないとして見きりをつけられ、

第二に　親に遠ざけられ、

第三に　友達にきらわれ、

第四に　臣下・奉公人にきらわれ、

第五に　自分の願いごとはすべて望み通りにならない。

右の五つのようになるものなので、仕舞いに自分を恨み、やがては何をするにも面倒で気が重くなり、心が乱れて思慮を失うようになります。「幼いころから、物事は自分の思い通りになるものではないことを心せよ」と言いたいのです。

リーダーとしての資質

一、大名というのは、家を継ぐべき長男は特別の扱いをし、次男以下は臣下・奉公人と同じと考えて、常にそのことを申し聞かせて子どもを育てるものです。幼い時から、よくよくそのことを話して聞かせ、長男より次男の方が、人を恐れ服させるようでは、家の中が乱れる基です。（中略）

人として、仁・義・礼・知・信を守るばかりでなく、自分自身を写し見る鏡がなくては、何事も分からないものです。それは、形ある鏡面をみがいて光沢を出す鏡のことではなく、自分の心を心でみがく鏡のことを言います。自身の行いが正しくなければ、心の鏡は曇ったままで、照らすことがありません。曇らぬようにするには、常に我が身の行いについて、人から学びとる外はありません。

自分の都合のよいことばかりを聞くことが好きなら、へつらう人々は主人の好きなことばかり言うようになります。主人の過ちや家中の不正を聞くことを喜べば、不忠者は日に日に遠のいていきます。忠告を時どき聞くことは天地の道にかなった行いです。（中略）

わたしには、井伊兵部少輔直政という家臣がいます。直政は普段、言葉が少なく、何事も人に言わせてだまって聞いており、気分が沈み勝ちで引き立たないように見えます。しかし、何事も考えが決まれば、直に意見を述べるのです。特に、我々の何かの考え違いか、皆の相談違いか、ためにならない事は、人のいない所で、物柔らかに事の善悪を申し述べるのです。それ故、後には何事もまず、井伊直政に内ないの相談をするようになりました。

井伊直政像
（彦根駅前）

楠正成像
（皇居外苑）

「堪忍」の教え

身を守る第一の要件は、こらえ忍ぶことです。どんな武芸も、こらえ忍ぶことなくてはできるものではありません。

天地自然の道理に適合するのは、身のわがままをしない堪忍、

地の理に適合するのは、先祖からの一郡一城を失わない堪忍、

人の和を得るのも、自分のわがままを出さない堪忍、

その外全身ですべての事に堪忍することを心掛けたいと思います。

臣下・奉公人のように仕える者や、民百姓の賞罰を正しく行ない、関係の深くない人にも情をかけ・身近な人も悪いことをすれば罰することこそ、仁の堪忍です。

君主に仕えて・自分の身命を顧みず、約束を破ることのないのは、義の堪忍です。

人のことを先にして自分のことを後にし、朝起きてから夜寝るまで、行儀正しくするのは、礼の堪忍です。

自分の心が増長しないようにしたり、他人をあなどり軽んずることをしないのは、知の堪忍です。

主君と父親には仕えるのに、仮にも、外見と内心の言語、動作などが軽がるしく、誠意のみられないようなことがあってはいけません。昔からのおきてを守るように心がけるのも大切なことです。

楠正成の理念と旗印――家康は何を尊敬したのか

「非は理に勝つ事能わず、理は法に勝つ事能わず、法は権に勝つ事能わず、権は天に勝つ事能わず、天は明らかにして私なし」（観心寺）

日本で、堪忍が完全に出来た人といえば、楠正成一人です。

織田信長殿は、現代に近い時代の名高い大将です。人もよく上手に使い、気が太く、知恵も勇気も優れた人です。しかし、堪忍することが七つ八つまでで、辛抱しきれずに破れてしまうため、明智光秀による謀反も起こったのです。

豊臣秀吉公は、昔から今までの人の中で、極めて度量が広く、知恵もあり勇気もあって、しんがしっかりした人でした。身分や地位の低い家に生まれたけれども、二十年の間に、全国を自分の政権下に治められたのも、そのような人柄であったからだと思います。しかし、あまり度量が広すぎて、分に応じた堪忍が破れたのです。

度量の広い事ほどよいことはないけれども、それも身の程を知らず、あらゆる事に程度を超して華やかに、身分以上の知行をあてがったり、人に物を恵み与え過ぎるのも、度量が広いとはいえません。自分自身か得意になりすぎたというべきです。武士に支給する領地も人に施す品物も、その分相応にするのが一番いいのです。ぜいたくな心をもたず、物事を節約し、常にその程を知ることは、正しい政道であるといいます。身に過ぎた知行や贈り物を与えるのをおごりというのに対して、ぜいたくをせず節約する人を、世間ではけちな人だとうわさをします。しかし、告から、賢明な君主は、相手の分に過ぎた物を与えたり、すべての事を派手に行うことはなく、身に過ちのないようにし、節約を心掛けているのです。

織田信長肖像（三宝寺蔵）

豊臣秀吉像（大阪城豊国神社）

家康公遺言―幕府存続の意味

―〈前略〉―此後は絶て御薬きこしまさず。又女房等も御側にさし置せ給はず。あつしく成まさらせ給ひても。外様の大名をめし出て。わが命旦夕に逼るといへども。将軍かくておはせば天下の事心やすし。されどももし将軍の政道その理にかなはず。億兆の民艱困することもあらんには。誰にてもその任にかはらるべし。

天下は一人の天下にあらず。天下の天下なり

と聞ければ。たとひ他人天下の政務をとりたりとも。四海安穏にして万民その仁恩を蒙らば。これ元より家康が本意にして。いさゝか憾みおもふ事なし。われ死せばいづれも先帰国して。将軍の指揮に従ひ江戸に参観すべし―〈後略〉

（『東照宮御実記附録十六』）

徳川家康像（岡崎城）

岡崎城天守閣と遺言碑